

# 企画展

## 「写真からみる茅ヶ崎の浜降祭」

茅ヶ崎市文化資料館



(写真上：1925年頃, 中：1955年頃, 下：2014年)

茅ヶ崎市・寒川町広域連携事業

主催 茅ヶ崎市教育委員会 寒川町



海に入る神輿(昭和 50 年頃)

## ごあいさつ

県指定無形民俗文化財である浜降祭は、毎年 7 月の海の日（第 3 月曜日）に行われており、夏の訪れを告げる暁の神事として知られています。

祭主である寒川神社の神輿を筆頭に、寒川町と茅ヶ崎市の神社から約 30 基の神輿が出御し、勇ましい掛け声とともに茅ヶ崎市の南湖の海岸に一堂に会する様子は壮観です。祭りの起源については諸説ありますが、寒川町と茅ヶ崎市の両市町域にまたがり、その由緒を伝えるものです。

本企画展では、寒川文書館と茅ヶ崎市文化資料館を会場として、古文書や古写真などのパネル展示を中心に浜降祭の変遷や神事のあらましを紹介します。

なお、展示しております資料は、市民の皆様からご寄贈いただいた貴重なものです。ご協力をいただきました皆様に深く御礼申し上げます。

## 茅ヶ崎海岸浜降祭

浜降祭は昭和 53 年に「茅ヶ崎海岸浜降祭」の名称で県無形民俗文化財に指定され、「かながわのまつり五十選」にも選ばれています。未明から早朝にかけて行われるので暁の祭典とも呼ばれ、夏の訪れを告げる風物詩ともなっています。

かつては 6 月 15 日に行われていましたが、この時期が農繁期にあたるため明治 9 年からは 7 月 15 日とな

りました。さらに、平成 9 年からは祝日の「海の日」に行われるようになりました。

## まつりのようす

寒川町と茅ヶ崎市の神社から約 30 基の神輿が出御し、茅ヶ崎市南湖の海岸を目指して神輿が練り歩きます。

茅ヶ崎甚句の音頭に合わせて「どっこいどっこい」という勇ましい掛け声と、神輿の鑼（台輪にある金具）を鳴らす音が響きあう中、各神社の神輿は南湖の海岸に設けられた青竹の鳥居をくぐって祭場に入場します。

祭場では各神社の神輿が着座する場所が決められており、年毎に列位の順が変わります。その際、祭主である寒川神社の神輿が着座する場所にはハマゴウと海藻を敷きます。

祭典では、寒川神社の神職により祝詞が奏上され、献撰、玉串奉奠などが行われます。

祭典が終わると、神輿は再び砂浜を練り歩き「どっこいどっこい」と声を張り上げ、海へ入る神輿もあります。その後、鳥居をくぐって退場し、それぞれ還幸の途につきます。

## 浜降祭の起源

浜降祭の起源については諸説ありますが、2つの説が挙げられます。

①寒川神社の神輿が、国府祭の帰路で相模川に流失し南湖の浜で発見されたという故事によるもの。

②寒川神社と鶴嶺八幡社が、古くからそれぞれ「みそぎ神事」を行っていたという記録によるもの。

①の故事というのは、江戸時代の天保9年(1838)の出来事と伝えられています。寒川神社の神輿が大磯の国府祭に参加した帰路、相模川の渡しにおいて氏子間で生じた争いにより神輿が川に転落し、そのまま流されてしまいました。数日後、南湖の網元であった鈴木孫七が所有する地引網によって海底より神輿が発見されました。それ以降、寒川神社の神輿はお礼参りとして茅ヶ崎南湖の海岸に渡御することが習わしとなったといわれています。

②の古い記録として、まず、江戸時代の天保12年(1841)に編纂された地誌『新編相模国風土記稿』が挙げられます。当時、鶴嶺八幡社の境内にあった佐塚明神社の項に「佐塚明神社 例祭六月二十九日、午後濱下りとして茅ヶ崎村海浜まで出輿す」と記されています。よって、古くより神輿が海岸まで渡御して禊(濱下り)が行われていたということがうかがえます。のちに佐塚明神社は鶴嶺八幡社に合祀されますが、この「みそぎ神事」はそのまま鶴嶺八幡社に継承されたと考えられます。

一方、寒川神社でも古くより浜で禊をしていたなどの伝承もあります。また、江戸時代の安永9年の寒川神社の記録に、6月15日に浜にて神前に酒を供えたと記されています。

このように、天保9年の神輿流失より以前から鶴嶺八幡社も寒川神社も両社とも海に出て「みそぎ神事」をしていた事が分かります。その後、明治6年に鶴嶺八幡社が寒川神社の摂社になったことにより、合同で海岸での禊を行うようになりました。しかし、明治10年に鶴嶺八幡社が摂社を解除したことにより、再び両社は別々に神事を行いました。現在のような形式で行われるようになったのは大正12年からとなり、神事の名称も「浜降祭」と改めました。そのため、明治生まれの古老の話では、「浜降祭」と呼ぶのは馴染みがなく、「みそぎ」や「はまくだり」または「合同祭」と呼ぶ人もいます。

## みそぎと浜降祭

みそぎ(禊)とは、水などで身体を洗い清めて罪や穢を祓うことです。

神輿が海に入り、みそぎを行うことで、穢が清められ、また、水の霊力によって神霊がより力を得るとも考えられていました。みそぎは神事のみに行われるのではなく、神社に参拝したに手水で手を洗い清めることもみそぎの一つとなります。こうした神輿が浜に降り、みそぎを行うという「浜降り」の神事は日本の沿岸地域で広く行われており、茅ヶ崎の浜降祭もこの一つであります。



南湖の浜に入場した神輿(大正時代)





祭典で礼拝する鈴木孫七家当主(昭和 52 年頃)

### 鈴木孫七家

寒川神社の神輿を発見した鈴木孫七の鈴木家は、お礼参りの渡御に際して寒川神社の御旅所（神輿の休憩所）神主を務めることになりました。例年、寒川神社は浜降祭の渡御に先立ち、同家へ使者を立て、祭りの準備一切を依頼する旨の口上を述べています。

また、鳥井戸にある鍛冶屋の石黒家は、孫七が海から神輿を引き揚げの際に手伝った者と伝えられています。寒川神社は石黒家に対しても謝意を表し、浜降祭の帰路に立ち寄りました。現在は道路事情などにより渡御は行いませんが、立ち寄りが行われていた際には、石黒家では安倍川餅を売り、それが売り切れるまでは神輿は出立しないという決まりがありました。

### ハマゴウと浜降祭

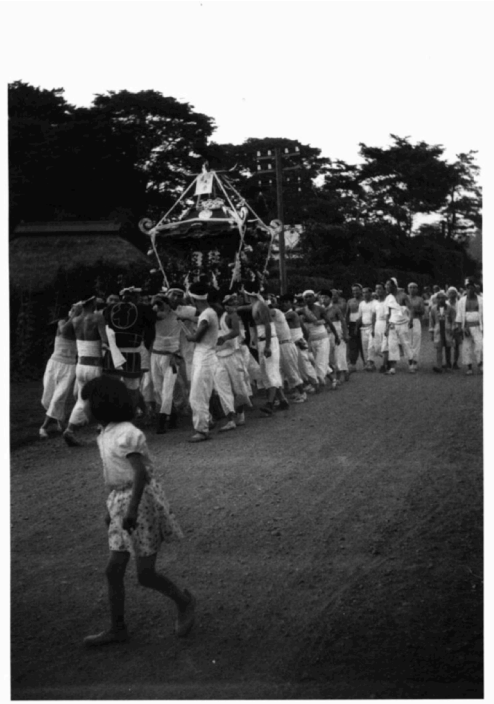
海岸の祭場では、寒川神社の神輿が着座する場所だけ盛砂がされ、ハマゴウと海藻が敷いてあります。これは、鈴木孫七が神輿を海から引き揚げ、しばらく自宅の裏で保管した際に、地面にそのまま置くのは恐れ多いとして、盛砂をしてハマゴウと海藻を敷いた上に神輿を安置したという伝承をもとに、現在も行われているものです。



寒川神社の神輿の下に敷かれたハマゴウと海藻(平成 19 年)

### 村回りと神輿の担ぎ手

浜降祭から村に戻った神輿は村内を一巡しました。これを村回りといいます。昭和初年まで、7月15・16日の2日間を要して行っていました。村中に祭り気分がみなぎり、人々が神輿の巡幸を追いかけました。村回りの際には立ち寄る家もほぼ決まっており、これらの家では大人には酒を、子供には菓子を用意して神輿の到着を待ちました。



地域を練り歩く下赤羽根の神輿(昭和 30 年代)

神輿の担ぎ手は、昭和初年までは15歳から40歳くらいまでの男性が中心となり、子供神輿は14歳くらいまでの男子が担ぎました。しかし、戦後の高度経済成長に伴う都市化により、祭りの意義も変化します。それまでは「習わし」として参加することが当然であった祭りも、生活様式の多様化によって担ぎ手の確保が困難な時期もありました。その後、保存会による再興の尽力も相まって、近年は参加神輿数や女性の担ぎ手も増加し、盛況をみせています。



厳島神社の子供神輿(昭和初年頃)



## 神輿道

かつて各神社の神輿は、国道1号の鳥井戸橋の辺りに集まり、寒川神社の神輿を迎えました。そこから鶴嶺八幡社の神輿が先導となり、国道1号を東に進み、十間坂2丁目交差点を南に曲がり、踏切を渡って直進し、魚市場に続く道を西に出てすぐの交差点を南下し、国道134号沿いにあった八大龍王碑の辺りから海岸に出ました。



神輿道を練り歩く南湖三社の神輿(昭和30年代)

## 御幣参りー南湖だけの浜降祭ー

浜降祭の後、南湖は独自に神輿の巡幸を行います。これは「御幣参り」と呼ばれています。このとき八雲神社の神輿が南湖を一巡する途中、江戸屋の重田家に寄るのは、お礼の挨拶のためといわれています。

「御幣参り」の起源は次のとおり伝えられています。それは元禄15年(1702)の鶴嶺八幡社の禊の渡御のことです。鶴嶺八幡社の神輿を村々の氏子が交代で担いでいたところ、南湖の若者が神輿を担ぎ終わってもなかなか宮元に返しませんでした。そのため浜之郷と南湖が争い、その仲裁に入ったのが江戸屋八郎左衛門(初代)でした。石垣や手洗石を鶴嶺八幡社に奉納することで和解しましたが、南湖も独自の神輿を持ちたかったので、重田家の屋敷神を天王山にまつて八雲神社としました。まもなく神輿も造られ、八雲神社は神輿のお宮という意味から天王様と呼ばれるようになりました。



## さいごに～「くらしの記録」を保存する～

我々を取り巻く社会環境は日々、大きく変化し続けています。衣食住は快適で効率的なものを求め、生活用品は手作りのものから商業的に画一化されたものへと変わりました。そして、IT技術の革新、市場主義やグローバル化の進展、さらには少子高齢化の進展などに伴い、生活様式の多様化などが進み、地域社会に大きな影響が及んでいます。

なかでも、年中行事や人生儀礼を行う機会が少なくなり、行事や儀礼が持つ意義や地域ごとの独自性が失われているように感じられます。

本展では、浜降祭に関する資料とともに、60枚以上にわたり写真資料を紹介しました。浜降祭も時代の変化に伴い変化し続けています。かつての太平洋戦争の際には、若者が出征した為、担ぎ手は60歳以上の人々であったという時もありました。浜降祭をもまた時代を写す鏡として記録を続けていくことが大切だと捉えています。

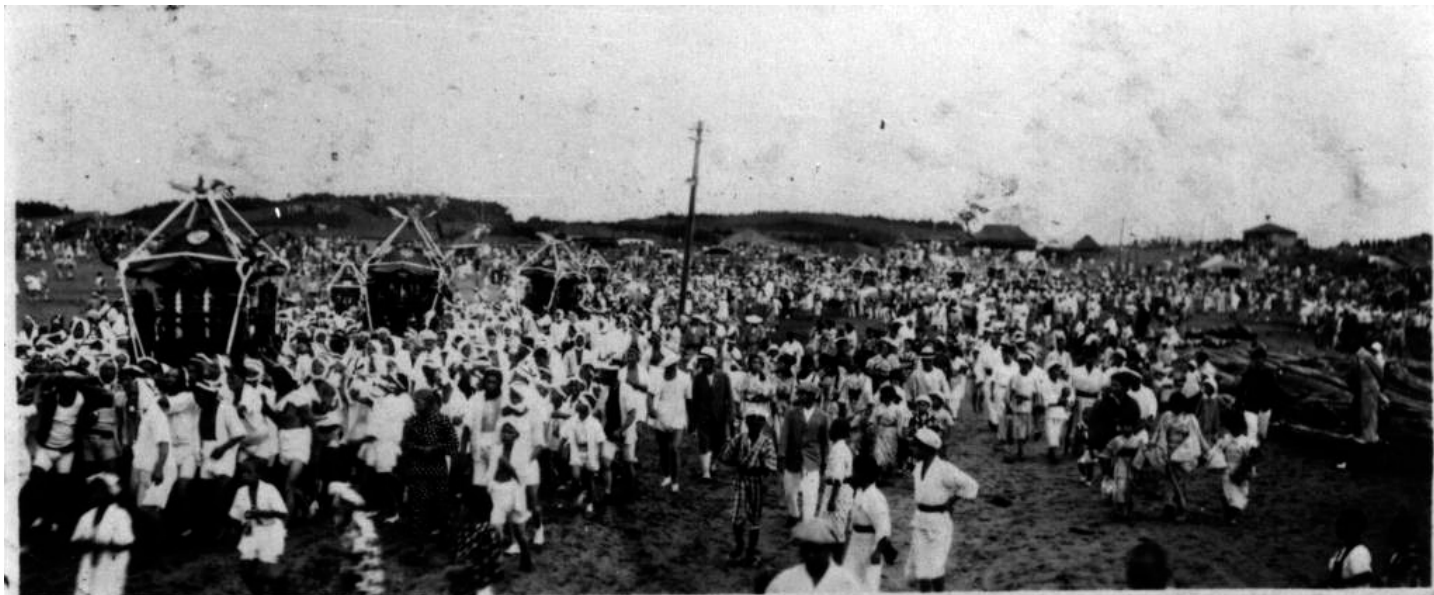
このように地域の人々の「くらしの記憶」を記録・保存し、次世代に伝える役割を担っていくことが、茅ヶ崎市文化資料館が「まちの博物館」としての存在する責務の一つであると考えます。



浜に入場する神輿(平成19年)







南湖の浜に入場した神輿(大正時代)



企画展「写真でみる茅ヶ崎の浜降祭」

主催 茅ヶ崎市教育委員会

茅ヶ崎市文化資料館

発行 平成27(2015)年6月

[http://www.city.chigasaki.kanagawa.jp/bunka\\_rekishi/bunkashiryokan/index.html](http://www.city.chigasaki.kanagawa.jp/bunka_rekishi/bunkashiryokan/index.html)  
shiryokan@city.chigasaki.kanagawa.jp

©本事業は、茅ヶ崎市・寒川町広域連携事業です。